

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

物語に重要な要素は何か

加藤 祥

本研究は、物語を構成する様々な要素のうち、物語が固有に成立するにあたり重要な要素が何かを探索的に調査した。また、要素の重要度が読み手一般に等しいのか、読み手によって異なるのかという点についても確かめた。調査は、①対照したテキストのある要素の違いがどれだけ物語の異同度判断に影響を及ぼすのか、②どの読み手にも異同の印象が等しいのかという点について行った。調査の材料として、先行研究で物語の要素として挙げられた物語文法や表現特徴などの各種要素について、物語テキストに部分的な操作を加えた改変物語を3種類の物語について380本作成した。これらの改変物語を用い、原本との異同度判定実験を行った。結果をもとに、物語の異同度に影響を及ぼさない要素と影響の大きい要素を整理し、読み手の印象との関連性ととも、物語に重要な要素を考察した。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

中国語における日源新詞の受容
—定着度調査を中心として—

張 曉娜

「御宅族」「達人」「萌え」等のように、1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。これまで中国における日源新詞の実態を言語使用者との関係でとらえた研究は非常に少ない。そこで本研究は、質問紙を用いた調査により、日源新詞の定着度を言語使用者との関連でとらえ、日源新詞の社会内での受容の実態をあきらかにした。

調査は中国の3つの都市で450人を対象に行った。その結果、調査された35語の日源新詞は全体的にある程度まで理解されており、定着に向かっていることがわかった。またその受容は回答者の社会的属性によりばらつきが見られ、たとえば、居住する都市の規模が大きく、若く、学歴が高い人のほうがより日源新詞を受容していること、10代の中学生はサブカルチャー関係の語彙に馴染みがあることなど、使用者の社会的属性との関わりもあきらかになった。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

The Sociolinguistic Generalization of Modern Chinese Kinship Terms in Taiwan

張 榕陞

Kinship term is always of interest in sociolinguistics and anthropology since it reveals how people conceptualize the social structure in a particular society. This paper aims to explore how modern Taiwanese use kinship terms and to explain how the generalization of these terms works in Taiwan. Two types of generalization of modern Chinese kinship terms in Taiwan are focused: Type I is the case of ‘calling non-relatives with kinship terms’; Type II is of ‘calling people who engage in specific occupation with kinship terms.’ The approach taken in this study is Conceptual Blending Theory. The results show that in type I, age and gender are two main factors that influence a speaker to cognitively blend a kinship term, and extend its usage to a non-relative people. In type II, age and gender also play important roles but with a special reference to the profession.

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)
【F棟3F ロビー】

Character Language in Mandarin Chinese:
A Case Study of Final Particles A ‘啊’ and Ya ‘呀’

張 祖寧

The purpose of this paper is to investigate character language in Mandarin Chinese with a specific focus on final particles A ‘啊’ and Ya ‘呀’, within the framework of functional discourse analysis approach. Character language is a speech style that can be changed flexibly by a speaker according to different situations and that can indicate the feature of the speaker (Sadanobu, 2006). Our results show that there is a gender difference in character language in terms of final particles A ‘啊’ and Ya ‘呀’, which is seldom recognized in the previous literature. There is the tendency that males use A ‘啊’, and females use Ya ‘呀’. We propose that it may be related to the speech style of male is usually related to straightforwardness and unsophisticated character while the image of female is of tenderness, gracefulness, and restrained character (李, 2006).

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

ポライトネス理論のD・P変数の感度の日中比較

燕 興, 伝 康晴

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は普遍的な枠組みとして提唱されたが、日本語、中国語のように西洋語と異なる体系を持つ言語では、西洋の言語を基準としたB&Lの理論が果たして当てはまるかという普遍性に対する批判がなされている。B&Lによれば、フェイスを脅かす度合い(W_x)は、負荷度(R)、話し手と聞き手の社会的距離(D)、聞き手の話し手に対する相対的力(P)の三要因が関数的に働いて決まってくるという。しかし、これらの変数に対する感度が文化や言語体系などによって異なっている可能性がある。本研究で調査した結果、実験者が想定したD変数のレベル分けに対する日中被験者の感度に大きな違いはなく、P変数のレベル分けに対する日中被験者の感度には大きな違いが見られた。中国社会ではD・Pをそれぞれ二次元の対立でとらえている傾向が見られ、日本社会ではD・Pに対する感度がもっと敏感である。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

「一体感」の遡及的醸成

幸田 瑞希

本研究の目的は、相互行為の終結における参加者たちの振る舞いが、それまで相互行為において暗黙的に共有されていた参加者間の一体感を遡及的に印象付ける合図 (cue) となり得ることを示すことである。周囲にも人がいる状況での立ち話の参加者に共有された一体感が、当事者だけでなく周囲の者に対してもいかに印象付けられるかを明らかにする。身体の向きや立ち位置といった非言語的要素に注目し、いかに相互行為の空間が維持、解体されていくのかを分析することで、以下の考察を導く。参加者間の一体感が崩れたように見える時にこそ、それまで一緒にいたことが参加者たち自身や周囲の者に印象付けられる。一見、相互行為の終了とは参加者間の繋がりを切るものである。しかし実は、相互行為が終わることで参加者間にそれまで共有されていた一体感は強調され、それまでの相互行為全体の文脈、すなわち「一緒にいた」ことが遡及的に示唆されるのである。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

大学生と中学生／高校生との連携ディベート授業の実践と課題

鈴木 佳奈, 久次 弘子, 甲田 純生

本発表は、大学生と中学生／高校生との連携ディベート授業の活動実践について報告し、このような活動を行う際の課題を検討するものである。

ディベートは、論理的思考能力の育成などを目的に、大学の初年時教育などで積極的に取り入れられている。ある地方私立大学でも、過去10年以上に亘って、県内の中学校／高校で、生徒と大学3年生が連携してディベートをするという活動を実施してきた。大学と受け入れ校の授業の範囲内で活動を行う制約上、ディベート形式や判定方法を簡略化したり、学生だけでなく受け入れ校の教諭に対してもディベート指導をしたり、など様々な工夫をしている。その一方で、大学の当該授業担当教員以外、関与するメンバーが年度ごとに入れ替わることに起因する指導の課題もある。発表では、大学生が実際に行ったディベートを例に引いて、大学生に対して議論の「論理性」を指導する際の課題について、フロアとの議論を行いたい。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

日本語対話における母語話者と非母語話者の話者交替についての差異

張 雪薇, 菊池 英明

本研究では、日本語を学習者している中国人話者の話者交替タイミングの特徴及び、日本語母語話者との差異を明らかにする。非母語話者が話者交替時にTRPの制約が成立しているのかを調査する。本研究では日本語地図課題対話実験を行い、隣接ペアの後続発話の開始タイミングに着目する。また、自然なタイミングで話者交替を行うには、発話終了を予告・予測する能力を求められる。先行研究において、基本周波数(f_0)、パワー、時間長などの韻律特徴量に概ね80%程度の精度で話者交替か継続かの予告情報が存在していることが報告されている。本研究は先行発話の文末における最後1アクセント句のピッチの傾きを調査することにより、母語話者と非母語話者の話者交替タイミングの差異が生じる要因を明らかにする。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)
【F棟3F ロビー】

日本語母語話者間における「悩み語り」の研究
—「人間関係に関する悩み」の会話の構造に注目して—

北口 信幸

本研究の目的は、親しい友人との会話で行われる「悩み語り」の中から、特に「人間関係に関する悩み」の語りにおいて、どのような発話連鎖や発話の言語形式的特徴が見られるのかを明らかにすることである。ロールプレイによって得られたデータを分析した結果、「人間関係に関する悩み」の会話では、会話参加者間のやりとりによって段階的に語りが進む発話連鎖を観察することができた。発話連鎖において、(1)話し手がため息や笑いを伴った【心情の表明】を「部分的報告」(串田, 2006)として行い、悩み語りの開始を試みていること、(2)話し手は、落ち込んでいる原因について、初めから詳しくは語らず、聞き手が【情報要求】や【理解】を行うことで、具体的な状況を説明することが可能になっていること、(3)話し手が【心情の表明】や落ち込む原因となった人物に対する【非難】を行った後、聞き手が【共感】を表す発話を行っていることなどが分かった。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

バイリンガリズムからみる消滅危機言語
—宮古島市のフィールドワークと中学生へのインタビューから見えてきた課題—

藤田ラウンド 幸世

本発表は、日本社会のマルチリンガリズムを主題に、日本の消滅危機言語の一つと位置づけられた宮古島でのフィールドワーク(2012-2016年)と中学生へのインタビュー(2013年-2016年)から、現在の「宮古語(みゃーくふつ)」の課題を考える。

宮古語島は、ユネスコにより「消滅危機言語」と指定され、以後、言語学の研究者による研究蓄積されている。本発表では、「言語」に焦点をあてるのではなく、「話者」と話者の言語使用に焦点を当て、さらに応用言語学的に言語の再構築につなげるための課題について考察を試みる。宮古語の前景には明治時代の標準語化政策とそれ以降の社会変動が関わる。換言すると、言語に対する社会的評価、また、親の意識や学校教育が重要であることは自明であり、ミクロのフィールドワークを精査することで「消滅危機言語」といわれる言語に関わる言語使用者の意識や態度を理解することで次への課題を拾いあげたい。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)
【F棟3F ロビー】

「やさしい日本語」の知的障害者への応用可能性
—時事情報に着目して—

打浪 文子

本報告では「やさしい日本語」の知的障害者への応用可能性を追究することを目的として、「やさしい日本語」を用いた情報媒体が軽度の知的障害者にとってわかりやすい媒体であるかどうかを、聞き取り調査から明らかにした。

本調査では、NHKの「NEWS WEB EASY」(<http://www3.nhk.or.jp/news/easy/>)のウェブサイトを用いて、軽度の知的障害者4名に聞き取り調査を実施した。調査内容は①各ニュースに関するレジビリティ、②各ニュースに関するリーダビリティ、③ウェブサイト自体への指摘、PCやスマートフォン等の操作性に関する指摘の3点であった。

結果より、①知的障害者の場合は外国人住民向けの情報提供よりも多くの視覚的な配慮が望まれること、②「やさしい日本語」による文体は軽度知的障害者にとっても一定程度わかりやすいこと、③ウェブサイトの検索の困難等といった知的障害者らに特有の課題が存在すること、の3点が明らかになった。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

中国の大学の交流プログラムにおける「対話」の様相
—日本語学習者に対する効果に注目して—

竹内 七奈, 谷 智子

中国における日本語学習者数は105万人と世界で最も多い。中国の大学教育において、多種多様なカリキュラムが生まれ、学習者の日本語能力の向上が図られている。しかし、近年学習者の母語話者との接触経験の少なさが実践的なコミュニケーション能力習得を困難にしていることが問題視されている。

本研究では、母語話者との接触機会が少ない環境におけるコミュニケーション能力育成支援の可能性を見出すことを目的とする。中国の大学の日本の協定校との交流プログラムを例にとり、それに参加した日本語学習者に対する半構造化インタビューを行った。そこに表出される学びや気づきに注目し、質的に分析考察を行った結果、学習者が日本母語者との「議論」を通して異なる価値観に触れることで、新たな視点を持つことができたことが明らかになった。積極的な「議論」は学習者のコミュニケーション能力育成を支援する一助となることを主張したい。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

怪談の語りにおけるジェスチャー視点の選択

伊田 吏佐, 岡本 雅史

本研究では、「怪談」の語りを取り上げ、ジェスチャーの2つの視点、「登場人物視点(C-VPT)」と「観察者視点(O-VPT)」がどのように使い分けられているかを考察する。分析資料としてプロの語り手による怪談の映像データ9本を用い、映像アノテーションツールELANによって「人物・状況紹介」「前置き(恐怖現場への接近)」「恐怖との対峙」「結び」の4つのフェーズごとのジェスチャー数、およびC-VPTのジェスチャーの使用場面を分析した。その結果、前置きフェーズと恐怖フェーズでジェスチャー数は大幅に増加すること、さらに登場人物の役割ごとに用いられるジェスチャー視点が異なることが分かった。特に、怪談を構成する役割の中では、「おばけ」と「体験者」はC-VPTを、「解説者」はO-VPTを基本的に多用し、「その他登場人物」ではジェスチャーがほとんど行われなかったことが明らかとなった。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

アマチュアによるものづくりのコミュニケーションからみる活動の継続性

松浦 李恵, 加藤 文俊, 岡部 大介

本稿では、家の中における自分の嗜好を第一とした「私」活動として、「コスプレ」という遊び・趣味に関わる製作場面、とりわけミシンを用いた自室での衣装製作場面を取り上げ、部屋という環境を構成するモノやその配置と行為との関係に着目する。家の中の「私」活動においては、学校やワークプレイスほどには他者との相互行為が生じない。特にコスプレのような趣味活動の製作は、ひとりで、自室において黙々と行われる場合も多い。そのため、このようなフィールドにおける諸行為を分析する上で、言語的資源とともに、身体運動や姿勢、視線の変化といったことがらや、モノとのインタラクションといった非言語的資源にも着目する。そして、「有用」で「正しい」知識や技術や、自らの技能の「向上」を目指すのではなく、一見「場当たりの」で「正しくない」ようにも見える所作を通して、逆説的に、「私」活動が継続していくことを示していく。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

中国人留学生同士の初対面会話に現れる「自慢話」の考察

金勝

本研究は、20代の中国人留学生が母語での初対面で「自慢話」をするか、また、それはどのような目的であるかを考察するものである。

結果としては、2組の会話内容から計3回見られた。また、判定された内容についてフォローアップインタビューを行った。その結果、全員が「自慢話」だとは思わないと答え、①ただの共感を求めるため、②相手との親密さを図るため、③好印象を与えるための自己アピールのためであったと答えた。つまり、中国人留学生にとっては「自慢話」ではなく、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つであることがわかった。逆に、日本人判定者のインタビュー結果では、日本人なら初対面では絶対言わないと答え、ある程度親しくなっても違和感があり控えると答えた。

以上の結果から、ポジティブ・ポライトネスを重んじる中国人留学生は、「自慢話」を一つのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしていることが分かった。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

ネットワーク環境の差異は外国人居住者の言語管理にどのように影響しているか
—長期滞日中国人居住者の事例分析—

鄒 暁依

日本には多くの外国人が居住しており、その滞在も長期化している。滞在期間が長く、接触経験が豊富なため、自分の言語能力をある程度認識できており、多様なストラテジーを駆使して言語問題に対処している。実際にどのように言語管理しているかについて、本稿では、親密度の高い日本人ネットワークへの参加度合いから中国人居住者の言語態度を明らかにした上で、接触場面の会話において、特に動詞使用に焦点をあて、言語管理にどのような差異をもたらしたかを考察した。

<<ポスター発表>> (3月19日 10:30-11:45)

【F棟3F ロビー】

外国人児童の小学校中学年における「考えを述べる力」の発達
—「意見文」の分析を通して—

菅原 雅枝, 齋藤 ひろみ, 鳶田 陽子

国内の教育現場では、日本生まれ日本育ちの外国人児童生徒のリテラシー発達が課題の一つとなっている。本発表では外国人児童(F)の書いた「意見文」を分析し、日本人児童(J)との比較を通して小学校中学年児童の「考えを述べる力」の特徴を記述する。データは3年生31名(うちF17名)、4年生44名(F20名)が書いた意見文で、それらを形式面、理由の述べ方、明確さと説得性から分析した。分析の結果、Fは形式の整った文を書く力は4年でJと同等になるが、述べ方や明確さ・説得性では4年でも差が見られた。また理由の述べ方が多様でも明確さや説得性の低いものが見られた。日本語を母語としない外国人児童の作文力の発達は、日本語の語彙・表現の力や述べ方の多様化と論理性・一貫性のある文章を書くこととの間に、時期的なズレがあると言えそうである。この特徴をリテラシー発達の局面として捉え、支援時に留意することが期待される。